

## 現代社会における諷刺

——「安倍政権」に関する「政治漫画」の分析をもとに——

東京情報大学 茨木正治

### 1 目的

この報告の目的は、現代の情報化社会における諷刺の意義はどこにあるのかを、新聞掲載の1コマ諷刺画である「政治漫画」を分析することを通じてその可能性を明らかにすることにある。現代の情報社会を、有用性を第一義とする情報が政治や経済といった個別領域だけでなく日常生活を含む社会全体に及ぶ状態であると位置づける。そこにおいて、情報の偏在と疎外・画一化が生じ人々の認知枠組みと態度に影響を及ぼす。そうした画一化に「水を差す」役割を諷刺画に求める。本報告では諷刺を社会規範からの逸脱を笑いによって表現する様式と捉える。規範の逸脱を認識のずれから「笑い」とするという点に着目し、その特徴が「異論」を生む。加えて、「政治漫画」における諷刺は、攻撃する諷刺対象への「笑い」が主体である作り手ないし政治で言えば大衆に返ってくる（「自らを嗤う」）ことが多い。この内在する「異論」を生む視点と自己省察性に求め、それが可能かどうかを検討する。

### 2 方法

そこで、2015年10月7日から2016年7月10日までの「安倍政権」（第3次安倍改造内閣）に関する「政治漫画」について、掲載新聞の記事と論説、投書と照らし合わせて、掲載新聞の記事および「論調」（社説、論説、世論調査、コラム、投書、川柳、コント等）と「政治漫画」の描き出しているものと照らし合わせて、描かれている政治情報の内容とその描かれ方について分析した。当該政治漫画の描かれ方は、記事との比較で扱う政治情報の「側面」を、論説、投書（特に川柳）との比較によって、政治漫画が描く情報の「視点」を明らかにすることをめざした。

なお、掲載数の問題から、「政治漫画」は主に『朝日新聞』掲載のものを分析対象とし、比較の対照上、記事・「論調」も同様の掲載媒体のものをを用いた。分析枠組みは、メディア研究におけるメディア表現の「フレーム」およびその形成過程である「フレーミング」の分析（Gamson & Stuart, 1992）と属性型議題設定研究を、

特に新聞記事と「政治漫画」の「側面」抽出において使用した。また、描かれ方の価値や規範については、「政治漫画」に関する修辞技法の研究の知見および新聞報道における「川柳」や「コラム」の諷刺研究（フェルドマン、1999）を用いた。

### 3 結果

対象期間の諷刺画には、参照しうる掲載新聞の記事がほぼ対応しており、その点では、情報の多様性を明確に反映するまでには至らなかった。しかし、扱う政治情報の視点については、掲載記事や論調の範囲内ではあるが、ある程度の「側面」を描き出す可能性が示された。また、諷刺については、特に川柳やコントとの比較から、「政治漫画」は同様の視点と諷刺の程度が見い出された。ここから、政治情報の視点の多様化の可能性を示唆できるものと推測された。

### 4 課題と展望

諷刺の程度の測定をする際には、より社会心理学やマス・メディア効果研究の調査手法の知見を借りることが求められる。加えて、比較対象を週刊誌やWebメディアに広げることで、諷刺の現代的意義がより明確になると考えられる。

### 文献

フェルドマン、オフェル、1999、「政治参加としての川柳：新聞における川柳の特徴と内容」『鳴門教育大学研究紀要. 人文・社会科学編』14: 85-90,  
Gamson, W. & D. Stuart, 1992, "Media discourse as a symbolic contest: the bombs in political cartoons," *Sociological Forum*, 7(1):55-86.